

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）

明治23年、松江に英語教師として赴任したラフカディオ・ハーンは、この町の風情や人々の暮らしに深い感銘を受け、松江藩士の娘、小泉セツと結婚しました。日本に帰化し小泉八雲となった彼は、松江を「神々の国の首都」と呼び、来日後初めて発表した著書『知られぬ日本の面影』の中で松江の一日を感慨深く記しています。翻訳・紀行文・再話文学のジャンルを中心に生涯で約30の著作を遺しました。



大雄寺

だいうじ
松江市中原町234



小泉八雲の「飴をかう女」の舞台となった墓地のある寺として知られています。

お話は
こちらから↓



銘菓 子守り饅頭の由来

松江をこよなく愛した文豪ラフカディオ・ハーンの著作「日本の面影」には、当時町人から聞いた話として、中原町の大雄寺に伝わる「飴をかう女幽霊」の話が紹介されています。弊店桂月堂（旧名因幡屋）はハーンの来松する八十年前、松江藩で唯一軒許された飴屋として商いを始めており、時の藩主、松平不昧公もお召し

上がりになったそうでございます。当時桂月堂が飴を作っていた場所は、まさに、この話に登場する飴屋と同じ中原町の大雄寺のすぐ近く…。そんなご縁があるせい、この女幽霊のことが気になってしかたありません。一心に我が子を助ける為に身が滅んでも幽霊になり、飴を与え続けた彼女のその思いに、生きた人間以上に人の有様を感じます。

また、律儀にお金を払って飴をかう女幽霊、心配になって後を追う町人たちが。悪い人間の出てこない、切ないお話です。

では、彼女が幽霊になってまで我が子に与えようとした飴とは？それが、このお饅頭に使っている「米飴」という水飴です。

この飴はお米に麦芽を加えてつくるもので、ミネラル分が多く、滋養強壮

に優れているとされております。昔は、乳の出ない母親が赤子に与えていたものです。

皆様のご先祖さまもきつとお口にに入れて楽しんで懐かしい味を、楽しんでいただければ幸いです。

店主敬白



桂月堂

創業文化六年
出雲国松江・菓子老舗